

海からきた使い

小川未明

青空文庫

人間が、天国のようすを知りたいと思うように、天使の子供らはどうかして、下界の人間は、どんなような生活をしているか知りたいと思うのであります。人間は、天国へいつてみることはできませんが、天使は、人間の世界へ、降りてくることはできるのであります。

「お母さま、どうぞ、わたしを一度下界へやってくださいまし。」
 天使の子供は、母親に頼んだのであります。けれど、お母さまは、容易にそれを、お許しになりませんでした。

なぜなら、人間は、天使より野蠻であつたからです。そして、我が子の身の上に、どんなあやまちがないともかぎらないからでありました。

「どうぞ、お母さま、わたしを一度下界へやってくださいまし。」と、幾度となく、その小さな天使の一人は、お母さまに頼みました。

毎夜のように、地球は、美しく、紫色に空間に輝いていました。そして、その地球には天使と同じような姿をした人間が住んで、いろいろな、それは、天使たちには、ちよつと想像のつかない生活をしていると、聞いたからでありました。

「それほどまでに、下界へいつてみたいなら、やってあげないこともないが、しかし、一度いったなら、三年は、辛抱してこの天国へ帰つてきてはなりません。もし、その決心がついたなら、やつてあげましょう……。」と、お母さまはいわれました。

美しい天使は、しばらく考えていました。そして、ついに決心をいたしました。

「三年の間、わたしは下界にいつて、辛抱をいたします。そして、いろいろのものを見たり、また、聞いたりしてきます。」と答えました。

天国から、下界に達する道はいくつかありました。赤い船に乗つて、雲の間や、波の間を分けてから、怖ろしい旋風に、体をまかせて二日二晩も長い旅をつづけてから、ようやく、下界の海の上に静かに、降りることも、その一つであれば、また、体を雲と化したり、鳥と化したり、露と化したりして、下界の山の上や、とがった建物の屋根のいただきや、野原などに降りることもできたのであります。

天使は、人間の力ではできないことも容易にされたのです。だから、小さなかわいらしい天使が、野蛮な人間の住んでいる下界へ降りてみたいなどと思つたのも無理のないことであります。

小さな天使は、いつしか下界に降りて、美しい少女となつていました。

ある秋の寒い日のこと、街はずれの大きな家の門辺に立って、家の内からもれるピアノの音と、いい唄声にききとれていました。あまりに、その音が悲しかったからです。故郷といえ、幾百千里遠いかわからなからです。そして、帰りたいと思つても、いまや、そのすべすらなく、まったく途もなかつたからであります。少女は、どうかして、やさしい人の情けによつて救われたいと思ひました。

空は、時雨のきそうな模様でした。今朝がたから、街の中をさまよつていたのです。またまこの家の前にきて、思わず足を止めてしばらく聞きとれたのでした。

そのうちに、街には、燈火がつきました。家のうちのピアノの音はやんで、唄の声もしなくなりしました。けれど、哀れな少女は、この家の前を去ろうとせず、そこに立つていました。

そのとき、りつぱな洋装をしてお嬢さんが出てきました。お嬢さんはこれから、どこかへ出かけられるようすでした。

「お姉さん、わたしもいっしょにつれていってください。」と、門に立っている少女は、呼びかけました。

お嬢さんは、びつくりして振りかえると、そこにかわいらしい、しかし寒そうな、さび

しそうなようすをして、少女が自分の顔を見上げていましたので、この子供は、どこの子だろうかと、くびをかしげたが、思い出せませんでした。

「どうして、私がゆくところを知っているの？」と、お嬢さんはいいました。

「わたしは、お姉さんが、おいでなさるところをよく知っています。お姉さんは、これから舞踏会においでなさるのでしよう。わたしは、おじやまをいたしませんからどうかつれていつてください。わたしは、みなさんの踊りなさるのが見たいのです……。」と、少女は頼みました。

「いいえ、おまえさんをつれてゆくことなどはできません。はやく、お帰りなさい。」とお嬢さんは、迷惑そうにいつて、さつきとあちらへいつてしまいました。

少女は、お嬢さんの行方をうらめしうに見送っていますと、お嬢さんの姿は、夕もやのうちに隠れて、消えていつてしまいました。少女は、しかたなく、さびしい方へと歩いてゆきました。

もう日は暮れかかっています。街を離れると、家の数がだんだん少なくなりしました。そのとき、途の上で、ちょうど自分と同じ年ごろの少女が、赤ん坊を負って、子守唄をうたっていました。この子守唄を聞くと、歩いてきた少女は、すっかり感心

してしまいました。

「なんとという、情けの深い唄だろう。天国にも、これより貴い唄を聞いたことはない。」
と、思いました。そして、少女は、近づく、赤ん坊を負って、唄をうたっている娘
にやさしく問いかけたのであります。

「もう日が暮れるじやありませんか。こんなにおそくなるまで、あなたは外に立って、唄
をうたつておいでなさるのですか。」と、少女はいいました。

赤ん坊を負っている娘は、知らない少女ではありましたが、こうやさしく問いかけ
られると、目に涙をためて、

「お母さんが病気なものですから、乳をたくさん飲ませることができないのです。なる
たけ、赤ちゃんを眠らせるために、こうして、いつまでも外に立って、唄をうたっている
のです。」と、いいました。

少女は、娘のいうことに、深く同情いたしました。

「そんなら、夜中でも起きて、あなたは唄をうたいなさるのですか？」

「夜中でも起きて、私は、牛乳を飲ませたり、泣くときは守りをしなければなりません。」と、娘は、答えました。

美しい、やさしい少女は、感心してしまいました。

「わたしが、今夜、あなたに代わって赤ちゃんの守りをしてあげましょうか……。」と、少女はいいました。

「ありがとうございます。母が、かえつて気をもみますから、どうぞお気かけなくください……。」と、娘は答えました。

少女は、しんせつが、かえつて迷惑になつてはいけななと思つて立ち去りました。

「はやく、あなたのお母さんのおなおりなさるように祈つています。」と、少女は、立ち去るときにいいました。

少女が歩いてきますと、あとから赤ん坊を負つた娘が追いかけてきました。そして、少女を呼び止めました。

「あなたのお家はどこですか……。」

少女は、さびしそくに、娘の顔を見て、微笑みながら、

「わたしの家は、遠いんです……。」と答えました。

娘は、聞いてびっくりしました。

「あなたは、こんなに暗くなつて、どうしてお家へお帰りになることができるのですか……

…きたない家ですが、今夜、私の家に泊まっていてください。」と、娘は、真心をこめていいました。

「わたしのことなら、どうぞおかまいなく……。」と、少女は、とつとつとあちらへ去つてしまいました。

その晩は、雨になりました。娘は、うす暗い家のうちで、赤ん坊の守りをしなが、先刻、前を通つたやさしい少女は、いまごろどうしたろうと思つて、その身の上を案じていたのです。しかし、この夜から、お母さんの病気は、だんだんいいほうに向かいました。

いつのまにか、冬がきてしまいました。

木枯らしの吹く夜の事です。地の上には、二、三日前に降つた大雪がまだ消えずに残つていました。空には、きらきらと星が、すごい雲間に輝いていました。

ここに憐れな年とつた按摩がありました。毎晩のように、つえをついて、笛を鳴らしながら、町の中を歩いたのでした。按摩は、坂にかかつて、地が凍っているものですから、足をすべりました。そのはずみに、懐中の財布を落とすと、口が開いて、銀貨や、銅貨がみんなあたりどころがつてしまつたのでした。

「あ、しまった！」と、按摩はあわてて両手で地面を探しはじめました。

指のさきは、寒さと、冷たさのために痛んで、石ころであるか、土であるか、それとも銅貨であるかさえ判断がつかなくつたのでした。通る人たちは、わき見もせず、みんな寒いので家の方へ急いでいました。また、通りがかりに、この有り様を見た人の中には、拾ってやって、相手が盲目だから、かえって疑われるようなことがあつてはつまらないとおも思ったり、また、中には、自分で後からきて銭を拾ってやろうと、よくない考えを抱いたような小僧などもありました。

ちやうどこのとき、やさしい少女は通りかかったのです。

「なんという、人間は、浅ましい心をもっているのでしょうか。天国には、こんな考えをもっているようなものや、薄情なものは一人もないのに！」と思いました。

「おじいさん、わたしが、拾ってあげます。」と、少女はいつて、銀貨や、銅貨を拾って、按摩の財布の中にいれてやりました。

年とつた按摩は、たいへんに喜びました。

「今夜は、道が凍ってすべりまますから、出まいかと考えましたのを、出たのでこんなめにあいました。まことにありがとうございます。」と、幾たびとなく札を述べました。

やさしい少女は、按摩の手をひいて、家へつれて行ってやりました。

家では、おばあさんが、こんなに寒く、道がすべるからけがでもなければいいが心配していました。そこへ、按摩のおじいさんは、少女に手をひかれて帰ってきました。

おばあさんは、おじいさんから、今夜少女に助けられた話をきくと、たいそう感心して厚くお礼を申しました。二人は、少女に、どうか上がってくれといって、家へいれて、火をたいて暖かにして少女をいたわりました。

「お嬢さんは、この町の人ではないようですが、お家はどこでいらつしやいますか。」と、おばあさんはたずねました。

少女は、急に、さびしそうな顔つきをしました。

「この世界には、わたしの家というものはないのでございます。わたしは、まったくのひとりぼっちで、今日はこの町、明日はあちらの村というふうに歩いていきます……。」と、少女は答えました。

すると、おばあさんも、おじいさんもあきれた顔つきをしました。

「まあ、そんなら、お母さんも、お父さんもおありなさらぬのですか？」と、二人はたず

ねました。

「わたしのお母さんもお父さんも、ここから遠い、遠い、歩いてはゆかれないところにいらつしやいます。」と、少女は答えました。

おばあさんは、うなずきました。

「二人とも、おなくなりなさったので……あなたは、孤児なんですね。」と、ひとりですうきめてしまいました。

盲目のおじいさんは、おばあさんのそでをひきました。

「やさしい子でもあるし、両親がないというのだから、幸い、家の子にしてはどうだな？」と、顔をおばあさんの方に向けて、小さな声でいきました。

おばあさんは、じろじろと少女のようすを見て、孤児にしては、あまりきれいで、どこもなく上品なので、なんらかふに落ちないように小さくびを傾けていました。

「そう、おまえさんのように、やすやすときめていいものですか……。」と、怒り声を出していいました。

「おばあさん、よく考えてみるがいい。こんな子供があつたら、どれほど、家の役にたつかしれないぜ。」と、按摩はいいました。

おばあさんは、なるほどどうなりました。そこで、急に、声をやさしくして、少女に向かつて、

「どこのお嬢さんですか、知りませんが、いまのお話のような身の上でしたら、私の家の子になってくださいませんか。じつは、私たちは、二人ぎりできびしくてしかたがないのですから。」と、おばあさんは頼みました。

少女は、遠い、空のかなたのふるさとを思い出しました。いつも、ふるさとのことを思うと悲しくなりました。

「わたしは、この家の子になってしまふことができませんけれど、すこしの間でよければ、おてつだいをしてあげます。」と、少女は答えました。

「そんなら、すこしの間でもいいから、てつだいをしてください。」と、二人は頼みました。

やさしい少女は、この日から、おばあさんやおじいさんのてつだいをしてしんせつに、二人のためにつくしたのです。

老人夫婦は、けつして、心の悪い人ではありませんでしたから、少女は、つらいことがあつても我慢をいたしました。そして、夜は、按摩のおじいさんの手を引いて町へ

もゆきました。

「おじいさん、寒い晩ですこと。」と、少女は、歩きながら、おじいさんに向かつて話しました。

「ああ、早く、春になって、暖かになってくれるといい。」と、おじいさんはいいました。木枯らしが吹いていました。そして、星の光が、ぴかぴかと、いまにも飛びそうに空に光っていました。少女は、じつと、星の光をながめて、ふるさとを思い出していたのであります。

春になりました。海の上は穏やかに、山には、木々の花が咲いて、野原には、緑色の草が芽ぐみました。ある日のこと、町の人々は、海の上には、不思議な景色が見えるとうわさしました。それは、蜃気楼なのであります。

「おばあさん、海の上に、不思議な景色が見えるといいいますから、いつてみましょう……。」と、少女は、おばあさんにいいました。

「ああ、いいお天気だから、おまえだけいつてみておいでなさい。私は年寄りだから、歩くのがたいそうです。」と、おばあさんは答えました。

少女は、独りで、海へいつてみたのであります。かぎりもなく、海原は、青々

としてかすんでいました。太陽の光は、うららかに、波の上を照らしていました。町の人々は、たくさん海辺へ出て沖の方をながめていました。そのうちに、もうろうとして夢のように、影のように、どこの景色とも知らない、山や、野原や、紫色の屋根などが浮かんで見えたのであります。

「ああ、わたしのふるさとの景色だこと。」といって、少女は飛び上がりました。天国から、下界へきてはや三年の月日がたったのであります。その間にいろいろの人間の生活に触れてみました。しかし、いまやふるさとに帰るときがきたのであります。

町の人々は、不思議な景色が見えなくなると、家の方に帰りましたが、少女だけは、岩の上に立つて、沖の方をいっしんに望んでいました。そのうちに、一そうの赤い船が、こちらをさしてこいできたのです。少女を迎えにきたのでした。少女は、それに乗ると、ふたたび天国をさして去りました。このやさしい天使は、永久に、この下界に別れを告げたのでした。

天国には、やさしい天使のお母さんが、我が子の帰るのを待っていてくれました。三年の間、下界に苦しんできた子供に、なんの変わりもなければいいがと心配していられた。小さな天使は無事に、ふたたびなつかしいお母さんを見ることができました。お母

さんは、やはり、心の美しい、汚れない我が子であると知りなされると、ほんとうに喜びになりました。

姉の天使も、弟の天使も、みんなが下界の有り様を知ろうと、このやさしい天使を取り囲んでお話を伺いました。小さなやさしい天使は、下界で見たことと知ったことを語りました。そして、正直な、哀れな人たちに、幸福を与えてやりたいと答えたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「少女倶楽部」

1925（大正14）年1月

※表題は底本では、「海《うみ》からきた使《つか》い」となっています。

※初出時の表題は「海から来た使ひ」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年2月12日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海からきた使い

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>